

## 観光の場で語られた昔話 「遠野の語りべたち」(民俗研究映像「遠野民俗誌94/95」資料編)文字テキスト版

Report on Investigation and Research Activity

川森博司

筆者は、国立歴史民俗博物館民俗研究部の継続事業である民俗研究映像の一九九四年度作品『遠野民俗誌94/95』の制作を担当した。この映像資料は、第一部「観光と民俗文化」(四五分)、第二部「民俗文化の自己表現」(四五分)、資料編「遠野の語りべたち」(三〇分)の三部からなる構成とした。このうち、資料編「遠野の語りべたち」は、観光客を対象に遠野の観光施設で語られた昔話の語り、身振りや顔の表情を含めて分析することができるように編集したものである。

ここに示すのは、この映像による昔話資料の文字テキスト版である。

### ①「せやみ(なまけ者)」(一九九四年九月一六日収録)

語り手：鈴木サツ(一九二一年「明治四四」生まれ、八三歳「年齢は取材

当時のもの、以下でも同様」、一九九六年没)

むかす、あつたずもな。

あるところに、なにもかにもせやみな若けえ者アいたつたずもな。親父おやアそれ見て、

「なんぼしたつてこの童子わらわア、年としにも不足あねえんだが、まず、こんなにせやみなこつてわかんねんだが、べっこ(ちょっと)旅さでもやってみつかないと思つたずもな。

そして、その童子わらわさ、

「これこれ、この童子わらわウ。お前まへ、そんなにせやみなこつてわがねんだが、べっこ旅さでも行つてきたらなんじょうだ」つたずもな。

してば、その童子わらわア、

「あい」って、旅さ行くことにしたずもな。

お袋のことにしえんば、「なんぼ、せやみだつて、腹はらばりもへらさしえたくね」と思つたずもな。どこのお袋だつてお袋つうのは、馬鹿は馬鹿なりに案ずるから、なんぼせやみだつて、腹はらばりもへらさしえたくねえもんだと思つて、握りっこ、いっぺえこしやえてきたずもな。そして、その男おとこさ持たしえたずもな。

その男おとこア、その握りっこ、ドッコイと背し負かつて、ブラーツと出はつていつたずもな。

行くが、行くが、行つてば、腹はらへつたつたずもな。腹はらへつたども、その男おとこア背し負かつてた握りっこ、一人しておろして食たいてくねかつたずも

な。だれか腹へった奴ア来たら、この握りっこおろして食いてえもんだと思つて、待つてたずもな。

してば下の方から、あの、ここいらへんで編み笠っていうんだども、編み笠、あの、紐でこうおさえる、編み笠かぶつて、こうして口開いた男ア来たつたずもな。

その握りっこ背負つてら男アそれ見て、「ああ、よしよし、あれだ、あれだ」、あれ腹へつて口開えて来たから、あれにおろしてもらつて食う気になつて、待つてたずもな。

してば、編み笠かぶつて口開いた男ア来たから、「じゃええ、お前、腹へつてらんべえ」つたずもな。

してば、その編み笠かぶつて口開えて来た男ア、「なしてよう」つたずもな。

そのにぎりこ背負つてら男ア、「いやあ、口開て来たからよう、腹へつてらつたらおれの握りっこおろしてけるじゃ。二人して食んべす」つたずもな。

してば、その編み笠かぶつて口開て来た男ア、「ねえさ、ねえさ、人の握りっこおろすどころの騒ぎでねえ」つたど。

「おれの編み笠の紐ア解けたども、手出すて締めるのせやみして、口開て押しええてきた」つて言つたとき。

せやみしてきりアねえんだと、上に上あつたつたとき。どんどはれ（これでおしまい）。

## ②「猿と蟹の餅つき」(一九九四年八月一日収録)

語り手：正部家ミヤ(一九二三年「大正一二」生まれ、七一歳)

むかす、あつたずもな。

あるとこに猿と蟹と仲良く暮らしてらつた。あるとき蟹っこ、ワヤと横に歩いていったずもな。

「猿殿、猿殿。今日ア天気もええが、まんず餅こでもついてかねえか」つて言つたずもな。そしたところア、猿ア、

「そんだなあ。そんだらばおれ、力持ちだからおれつくからよ」つて、白出してきて、餅つく支度して、つきはじめたずもな。猿は力持ちだから、ドスーンとドスンとついたと。蟹っこはつくわけにいかねえから、

白のほどりっこさたかつてから、こね方したずもな。はさみっこで、「はいきた。それいいぞ。はいきた」つて、こねてらさずもな。そのうち

に美味そうな餅こつけてきたつた。

そうしたところア、猿ア、あや、美味そうな餅こだな。これ、蟹なさ食しえたくねえなと思つたずもな。

「なんとかしておればりして食いてえもんだが、なんじよにしたらえかべ」と思つた。

そうしてついてるうちに、ピカピカと光る真つ白な餅こつけてきたつた。いい按配などこ見計らつて、蟹っこのもとこ、たまげかしたずもな。

ワツてたまげかされたから、蟹っこたまげで、白のほどりっこから手っこ放したと。そうすると白の外さポタツと落つてしまつたずもな。

それ見て、猿ア「それ、いかつたべ」と思つた。今だと思つたから、餅の入つたままの白、むんずりと引つつかんで、担んだと。山たててワラワラワラと走り上がったずもな。

それ見て蟹っこも、

「おれも手伝つただから、猿殿、猿殿、おれさもその餅っこ、ぺっこ食しえろでば。猿殿、おれさもぺっこけろでば」つて、ワヤワヤワヤ

ヤと横に上がつたつた。なんぼ蟹っこ横にワヤワヤと上がつたつた、猿の足の方ア速えから、猿ずーっと山の中さ入つてしまつたずもな。

そんだども蟹っこ諦められねかつた。おれもあの餅っこ食いたいもん

だと思つたから、

「猿殿、猿殿、おれさもその餅っこ、ペっこけろでば。猿殿、おれさもペっこ食しえろでろでば」って、ワヤワヤワヤと上がってつたと。

そうしたところア、山の真ん中さ行つたところア、その餅アポッター落つてらつたと。つきたての餅こ、山ゴロンゴロンと転んできたから、木の葉っこだのゴミっこ、いっぺえ、くつつけて、湯気っこポヤポヤとたてて、落つてらつたずもな。それ見つけたと、蟹っこア。さあー、喜んで。餅っこ落つてらと思つたから、はさみっこで挟んで、

「ふっばれ、かっばれ、食ば、美味ごさ」

って、その木の葉っこだのゴミっこ、サツパと取って、はさみっこさ挟んで、ムチャムチャ、ムチャムチャと泡っこ吹き吹き食つてらつたと。

それと知らねえから、猿、山の中さ入つてって、白下ろして餅食んべと思つたところア、白の中さ餅入つてねかつたと。「さあーこれ、すくつたことした(しまった)」と思つたと。餅落ろしてきたと思つたから、山走下りてきたずもな。そしたところア、山の真ん中で蟹っこア、

「ふっばれ、かっばれ、食ば、美味ごさ」

って、ゴミっこだの木の葉っこサツパと取って、はさみっこさ挟んで、ムチャムチャ、ムチャムチャと、美味そうに泡っこ吹き吹き食つてらつたと。それ見て猿アごしええやいた(腹を立てた)ずもな。

「これこの蟹さち、それはおれの餅だから、こっちやよこしえ」つたずもな。蟹っこも聞けねえふりして食つてらと。そだども猿アあんまり騒ぐから、そこさ取つてら、ゴミっこだの木の葉っこのついたやつ、団子に丸めて猿の面めがけてベターツとぶつけたと。そうすると、猿アその餅を引っ剥がすべと思つて、やつけど引っ張つたところア、われの面の皮まで剥いでしまつたんだと。それから猿の面がまっかつかになつたんだとさ。

どんどはれ。

### ③「かつこうとほととぎす」(一九九四年七月三一日収録)

語り手：菊池ヤヨ(一九二六年「大正一五」生まれ、六七歳)

むかす、あつたずもな。

あるとこに、とつても仲のいい兄弟まり(兄弟づれ)あつたつたずもな。それこそある年の餓死時だつたが、とつても妹思いの姉、あるとき、山さ行つてからホドコ(野生の小型の芋)掘つてきたんだと。

去年ナみてえに、ほーんとに米っこの穫れねえ年だつたずもな。姉、山さ行つてホドコ掘つて、そして持つてきて、それ焼えて妹さ美味えとこばり(ばかり)食しえたんだと。

そしたところア妹ア、「こんなに美味えホドコだもの、おれさこんなに美味えとこ食しえたから、おれの姉、なんぼ美味えとこ食つたべ」と思つたずもな。そして、姉とこ押しえ付けて、腹割つてみたんだと。そうしたところア、姉の腹の中さば、堅えそれこそがんなとこばりいっぺえ入つて、美味えとこは一つも入つてなかつたんだと。

姉、それ聞いてから、

「なんたらお前のががつてから、おれがんなこばり食つたつたが」って、ガッコー、ガッコーって、カッコー、カッコーって、鳴きながら鳥っこになつて飛んでつたんだと。

そしたところア、妹ア、われ姉の腹さ、それこそ包丁立ててみたところア、がんこばりだつたから、おれア姉の腹さ、包丁かけてすまつた、包丁かけてすまつた、ホーチョーカケタ、ホーチョーカケタって、そして、ほととぎすになつて飛んでつてすまつたんだとさ。

どんどはれ。

④「とうふとこんにやく」(一九九四年八月四日収録)

語り手：菊池栄子(一九四〇年「昭和一五」生まれ、五四歳)

むかす、あつたずもな。

あるどこに、豆腐とこんにやくと隣同士で暮らしていたつたと。あるとき、豆腐は棚からポタッと落つたつたが、大怪我してすまつたずもな。それ聞いた隣のこんにやくア、「いやあーまず、隣の豆腐どんは大怪我したふうだが、なんじよな按配でいかんべえかなあ」と思ったと。

べっこ(ちよつと)様子っこ見さ行つてくつかなあと思つて出はつたずもな。こんにやくだから、ベツタリクツタリ、ベツタリクツタリと歩いて行つたと。豆腐の家さ行つて、

「豆腐どん、豆腐どん。お前、大怪我したふうだが、なんじよな按配でらー」つて言たど。したつけ、豆腐はさつぱりこなれてて、

「こりゃー、このかたに見てけつちやあ」つて言たど。

「おら、べっこばり棚から落つるとな、こんにやに大怪我してすまつてえよ。さつぱり生きた気ねえが、そのときアお前達ええじえな。べっこばり棚から落つても、怪我することアねくて」つて言たど。したつけ、こんにやくア、

「ねえさ、ねえさ、みんな同じよ。おらだつてな、毎日毎日「今夜食う、今夜食う」つて言われんもの、いつ食れんべかなあと思つと、生きた気ねえじえ」つて言つたつたど。

どんどはれ。

⑤「貧乏神と福の神」(一九九四年八月三日収録)

語り手：白幡ミヨシ(一九一〇年「明治四三」生まれ、八四歳)

むかす、あつたずもな。

今度は、「貧乏神と福の神の話」します。

貧乏神と福の神と、二人で出はつて行つたんだつて。誰でも呼ばれた者は先さ入るごとに行つたんだつて。

二人づれで出はつて行つたれば、第一番先の大けな館の家の前、通つたんだつて。そうしたれば、その家の前にさ行つたれば、その大きな館の家に大勢の人がいたつたんだつて。そうしてから、なにかやつらつたんらん、

「なに、この貧乏神」つて、叫んで喧嘩してらとこなんだかなんだか、貧乏神つて、ほれ、言うてらつたんだつて。そしたれば、貧乏神が先さ聞きつけたもんだから、

「あれあれ、おれ先さ呼ばつてらが」つて、そこさ貧乏神が入り込んだんだつて。

と、あとはどこまで行つても誰も福の神つて呼ぶ人がなかつたんだつて。

ていうから、村はずれから村はずれまで行つたども、誰も福の神請ず人が一人もなかつたんだつて。

さあ、それから、今度ア、山道越えて、山越えて行かねえばねえがまず、どこさ行つたらいかんべ、こう山道越えて行くつうと夜中になるし、なんでかんでここのへんさ宿取ねばねえがと思つて、そこら見たれば暗くなつてしまつたし、よく見たれば、なんだか火の明りなんだか、そのランプの明りなんだか、サツとした明りがあつたんだつて。

それから、そこさでも行つて宿取んねえと、山道越えてくと、夜中に山道越えねばねえから、そこさでも行つて宿取るかと思つて、そこさ行つて、その明りをたよりに行つて、覗いて見たんだつて。

そうしたれば、小さき家に、爺様と婆様が二人向き合つて、何か話してるんだよ、こうやつて。睦まじそうに、ツチブチツチブチつて話してやつたんだつて。それから、ほれ、声かけてやら、

「今晚、ここさ宿借られなかんべか」つて言うたんだつて。そしたら、それを聞こえるはさ早く、ほれ婆様が、

「はいはい。おら家では泊めてえことは泊めてえども、見るとおりこれ、このとおりの家で、着しえるものもねえし、食しえるものもねえども、それでもよかつたら泊まつてけ」つて言うたんだつて。

そしたら、泊まつてけつて言うたんば、すぐそこにいた、かたきにいた爺様が、ちよつと立つたんだつて。で、どこさ行つたんだべと思つたば、外さ行つたんだつて。

そうしてれば、ほの外さ行つた爺様が何にもねえから、小柴を束ねて来たんだつて。それを大きき家なれば、大きき薪もあるんだども、何にもねえぐれえだから、ほかでいらねえ小柴つこ束ねて来たんだつて。

そしてから、その今度ア、その焚き火さ、ほれ、その柴をくべたもんだと。そして、かけたものは何だかと思つたものの、何にもねえから、白湯だけだつたんだつと。それでも、その白湯を、食わしえるものもねえつうのだから、白湯を飲ましたんだつて。

そして着しえるものも、かぶしえるものもねえつて言うたども、その柴をくべたために、小さき家だから、すぐその家の中も暖まる、白湯を飲んでも心の中から体の中まで暖まつて、その家さ福の神が入り込んだんだつて。

そうしたもんだから、その家が次の日から、もうすぐ主長者になつて、そこらじゅうの一番長者となつたんだつて。

福の神が入れば長者になるんだと。貧乏神が入ればなんた立派な家でも、その家が貧乏になるといふのは、誰にしるわかっているこつた。そういうようなんだといふ話です。

はい、どんどはれ。

## ⑥「すずめとつばめ」(一九九四年八月二日収録)

語り手：菊池玉(一九三四年「昭和九年」生まれ、五九歳)

むかーし、あつたすもな。

むかーしから、雀と燕と友達だつたんだと。そして、ある家のお庭つこで、「泥つこちよす」して、遊んでらつたすもな。そうしたところア、その雀の親父だかな、おつ母だか、どつたつたか具合悪くなつて、今、死にそうになつたんだと。そしたつて、そのお袋が、

「こりやこりや、雀や燕。今な、おつ父死ぬとこだから、目下ろすところから、早く来て、最後の水こ、けろけろ」つて叫んだんだと。

そうしたところア、燕、あやーつ、親のおは死に別れか。ほんだらば、早くおら、お化粧して、黒え物を着て、そうやつてから親の死に目に会わねばねえつて、そうしてわれの部屋さはねこんでから、さあー紅つこつてたり、白粉つこつてたり、黒え着物つこ着たりしてから行つたす。

雀は、お庭で遊んでらるときに、「泥つこちよ」してボロボロとゴタゴタと汚れてら着物をそのまま、「あやーつ、親父死ぬとこだから大変だ」つて、そのまま泥足でベタベターつと走り行つたつと。

そうしたつて、親父目下ろしそな「フーフー」つてらから、

「あやー、お父お父」つて、最後の水こ何回も飲ましえたすもな。だけえ、「雀、だかー」つて一言しゃべつてから、目下ろしてすまつたんだと。

そうして、燕走り行ったときは、ハア、もう親父ア目下ろしてしまつたから、「燕がー」って親父は叫ばねえから、親父の罰で、燕つものア、われアお化粧したり、黒え物着てりつぱに装よるために、親の死に目に会んねえから、一生待つんで、虫けらばり食って穀物つもの食れねえ、鳥つこに、燕つう鳥つこになつてしまつたんだと。

雀はなんぼポロポロつもの、泥つこのついたまま、そのまま行つて、親父さ最期の水つこ飲まして、

「お父だか」「雀だか」って最期の言葉交わしたために、雀は一生穀物を食って暮らす雀つう鳥つこになつたんだと。

だから、たとえどこにいたつて、どんな仕事やつてらからたつて、親、今死ぬそうだったらば、何より先に親の死に目に、最期の水つこと最期の言葉は、かけてけるものなんだとさ。

どんどはれ。

### ⑦「親父買ってきた話」(一九九五年一月八日収録)

語り手：高橋好子(一九四七年「昭和二二」生まれ、四七歳)

むかす、あつたずもな。

ある家に、若けえ父と母といたつたずも。いつつも仲良く暮らしてだつたずが、あるとき、その父、町さ用足し行つたずもな。

用足し行つたつて、ずーっと前にわれの死んだ親父とそっくりのものあつて、それを買ってきたんだと。そして、家さ持つてきて、木櫃の中に入れて、そうして日に三度まんま上げたり、拝んだりして、おらアええもの買ってきた、親父買ってきた、親父買ってきた、朝間は「さあ、親父さもまんま食せてくる」、昼間になつても「親父さもまんま食せる」、夕飯も「親父さも食せる」って、毎日そうして、親父さ会いさ行つてあ

つたと。

さて、その母さま、

「奇態だな(変だな)、なんに親父買ってきた、親父買ってきたつてするが、これなんだな親父買ってきたんだべ」と思つて、いつつから氣に成つてあつたずもな。

そうしてあるとき、その父さま、ちようどいねえときに、母さま、ほれ、今日こそその親父つうもの、なんだなもんだか見んねえと思つて、さあ、そこさ行つてから、開けて見たんだと。

そうしたつて、その中にあるものは、なんに、立派な姉さまだつたずもな。さあ、その母さまごしやいで(腹を立てて)、何にしたずがな、「親父買ってきた、親父買ってきたつて言つてらが、なに、あの中さ入つてらものは、美すう若けえ姉つこだつて」ど。

さあそれから、もうなんじようにもかんじようにも我慢できなくて、家さ帰つてくるなり、その父さま、

「こりや、お前、何ぼが(嘘)ふいて今までおれさ隠してらべ」

「何にも、おら隠してるものねえぜ」

「何したずがな、親父買ってきた、親父買ってきたつて、おれのことば騙してから、あの中さ入つてらもの見たつて。若けえ姉つこだつて」

「違る違る、親父だ」

「違うでは、姉つこだつて」

「親父だでは」

「姉つこだでは」つて、

さあそれから、今まで喧嘩したこともねえ夫婦まり(夫婦づれ)、すつかり喧嘩、大喧嘩になつてしまつたずもな。

そうしたつて、ちようどそのとき、外から六部つう、昔で言えば和尚さん、ものをわかてる和尚さんのような、六部つう人ア通りかかつて、何事だべと思つて、覗いて見たつて、その若けえ父と母として、さあー

大喧嘩してらとこさ来て、

「こりゃこりゃお前達ア、なんに喧嘩してらんだ？」

したつけ、

「実はこういうわけで、親父買ってきたつうからと思つて見たつけ、親父でねえ、若けえ姉っこだつけ」

そして、

「いや、親父買ってきてら」

「いや、姉っこだ」って、また、そこで喧嘩すつから、

「まずまず待て」と。

「その親父だか、姉っこだかわかんねえが、それ持つてきて見せろじゃ」  
つて言つたすもな。

そしてつけ、中から持つてきて見せたつけ、六部つう人見たつけ、はあー、わかつたんだと。

そして、まずまずこりゃ、六部は真ん中さ、ねまつて（座つて）、

「こりゃ、こごさ父ねまれ。こつちさは母ねまれ」つて座らせて、その六部つう者、こりやつて見て、

「こりゃあ、よく見ろ。真ん中にいるのはおれだべ。こつちの右側にねまつているのは父だべ。こつちにいるのは母。これはな、親父でもねば、姉っこでもねえ。鏡というものなんだぞ」つて、そこではじめて鏡つうものを教られて、はあー、それが鏡だったんだな、という話だったさうです。

どんどはれ。

### ⑧ 「めでたい名前」(一九九五年一月八日収録)

語り手：細越雅子(一九五四年「昭和二九」生まれ、四〇歳)

むかす、あつたすもな。

あるどこに夫婦がいたつたすが、その夫婦さ、やつとかさつとか童子できたんだと。ほしてば、ほれ、出はるの楽しみで楽しみでいたつたすども、やつとか出はつてみたところア、男童子こだつたすもな。

「あや、いかつた、いかつた」つて、まるで親父も母も喜んだと。

「はあーおら家さ、これ家督出はつたじえ。家持ち出はつたじえ」つて、まるで喜んだことアええが、今度ア、その大事な跡取り息子さ、何と名前つけんべと思つたすもな。

「ほんにな、せつかくできた童子だもの、いい名前つけんべじゃ」となつた。

そこでほれ、名アつけんべ、なに、どつたな名つけんべ、いい名前ねかんべか、うんと考えて考えて思案して、ほしてつけた名前が「ありがたい」という名前だったと。

「こんなにありがたいことねえから」んで、「ありがたい」とつけんべつて、「ありがたい」という名前なつたすもな。

そしてば、それからまたのほれ、一年とか二年経つてんば、またの腹大きくなつて、またの、出はつたすもや。男童子だったと。

「こりゃ二人続けて男童子だ。こんなにええことねえ。んだらば、今度ア何と名前つけんべな」

「だなあ」つて、またの二人で考えたど。ほして、またの今度アつけた名前が、こんなにええことねえから、「うれしい」という名前にすんべとなつたど。ああ、こんなに嬉しいことねえから、「うれしい」つう名前いいなつて。さあ、兄貴ア「ありがたい」だべす、二番目にできたのは「うれしい」だべす。

してば、またのほれ、一年、二年経つたところア、三番目出はつたすもな。またの男童子だったと。

「今度ア何にすんべ」つてしたらば、出はつたのはちょうど正月だった

ずもや。

「正月に出はったもの、これ以上おめででえことねえんだから、「めでたい」という名前にすんべ」

三番目息子は「めでたい」という名前になったと。

さあ、「ありがてえ」「うれしい」「めでたい」、大っきくなつたずもな。そして、ほりや、親の手助けして稼ぐようになったと。

そうしてらつたずが、あるとき、親父ぼっくり死んでしまったんだとさ。死んだとき、その一番大っきな兄貴しか、家さいねかつたずもな。

さあ、泡食つて、弟さ教えねばねえと思つて、畑まで走えでいつたと、走えでいつてから、教えたこといかつたずが、息切つて走えでいつて、

「おいおいおい」つたど。第二人、「何で来た」と思つて、

「はっ」たつたず。一番の兄貴が第二人さ叫んだと。

「こりや、うれしい、めでたい、親父死んだぞ」つたず。そうしてば、

畑稼ぎしてらつた第二人、

「ありがてえ、親父死んだか」と返答したつたど。

だから、生まれたとき、いい名だ、いい名だといつてても、あとあとまていい名になることアねえから、童子さ名つけるときには、よっぽど考えてつけてねば、わかんねえんだとさ。

どんどはれ。

### 9 「遠野三山の話」(一九九四年八月六日収録)

語り手：佐々木イセ(一九三〇年「昭和五」生まれ、六四歳)

むかす、あつたずもな。

遠野の石倉の権現さまさ、ある晩げ母神さまが三人の娘神さま連れて泊まつたんだと。そしたところア、母神さまア夢見たずもな。

真つ白い髭のお爺さんが現れてから、

「お前には三人の娘あるが、遠野にや石上山、早池峰山、六角牛山て三つの山あるから、その山の守り神になつてもらいてえ。そして、早池峰山が一番高くて一番立派だから、明日の晩、天から花が授かつた者、早池峰山の守り神にしてける」

そういう夢見たんだと。ああこりや神様のお告げだな。で、次の明日の晩げ待つべし。ほして次の晩げ、われんどの社で寝てらと。一番大っきな姉さまと、真ん中姉さまハ、すぐすやすやと寝込んだずもな。一番下の妹の神さま、寝ねえでずーつと天眺めていたと。そしたところア、夜中になつたところア、ずーつと天の高いとつから、美すいな光みんな降りてきたずもな。

あら、あれなんだべと思つて、眺めていたところア、そりやなんともしわれねえ美すいな蓮の花だつたんだと。そしてそれが、一番大っきな姉さまの胸元さ降りたずがな。

それ見た妹の神さま、は、大っきな姉さまが早池峰山の守り神になんだな、おら早池峰山さ行きてえ。幸い二人とも寝込んでらから、今のうちにこの花っこ、おらのとこさ盗んできて、こつそりその花こ盗んできて、自分の胸さ上げて寝てらんだと。

朝間になつたところア、姉さん達、目覚まして、

「こりや、妹、起きろ起きろ。お前の胸さ花授かつてらから、お前、早池峰山の守り神になることに決まつたじよ」。

そして、三人でわれんどの社を出てから、早池峰山さ登りつ口に早池峰山神社という神さまあるの、で、そこさ行くと、ちよこつとした峠があつて、で、こつちから行くと右つ側に、神わかれ神社という、ちつちやな祠があるの。そこで三人の神様が別れたんだと。だから、そこを「神わかれ」つていうんだと。

そして、大っきな姉さんは石上山さ登り、真ん中の人は六角牛山さ行



き、一番下の妹の神さまは早池峰山に登ったんだと。そうして三人で遠野の山を守っているんだと。

これが遠野三山の話っこ。  
どんどはれ。

(大阪大学文学部、元国立歴史民俗博物館民俗研究部)

※付記

( )内は、川森による語意の補足である。

方言の解釈の一部について、遠野市在住の佐藤誠輔氏のご教示を得た。  
また、資料のテープ起こしに際して、牧ヶ野靖子氏の協力を得た。

---